

第14回大会報告記

河内 恵子

日本アイリス・マードック学会第14回大会が2012年10月13日（土曜日）に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された。2年前に開催校をつとめたこともあり、かなりスムーズに準備を整えることができた。これは、いつものことながら、さまざまな学会や研究会の準備を手伝った経験がある大学院生たちの無駄のない作業に負うところが多い。

11時から行われた総会は会長挨拶（平井法）に始まり、理事会報告（榎本真理子）、事務局報告（岡野浩史）、会計報告（岡野浩史）と続いた。三氏を筆頭に、当学会運営の中心的役割を担っている理事会メンバーには深く感謝したい。

研究発表は13時から始まった。中西ウエンディ氏はマードックの『緑の騎士』の演劇性についての見解を示した。斉藤佳代子氏はヴァージニア・ウルフのナラティブ戦略を『幕間』を題材に論じ、佐々木典子氏は現代のイギリスを代表する小説家カズオ・イシグロの短編集『夜想曲』の世界を紹介した。30分の休憩の後に行われた杉浦千秋氏の発表は、ヴィクトリア朝の女性作家ジョージ・エリオットの文学世界とマードックのそれとを女性たちの道徳的覚醒という視点から考察した。最後の発表者中窪靖氏は、マードック文学におけるユダヤ人主人公のありかたを『かなり名誉ある敗北』と『地球へのメッセージ』の比較をとおして提示した。いずれの発表も具体性に富み、それゆえに説得力があった。

今回の各研究発表を聴いて強く感じたことは、

マードック文学が有する「広く、深い世界」だ。彼女自身の作品が多岐にわたるテーマを扱っていることを再認識するとともに、その作品群を中間点にして、19世紀イギリス文学と現代イギリス文学が繋がることを確認した。つまり、マードックを中核にジョージ・エリオットとカズオ・イシグロは連結するのだ。マードック文学の「広く、深い世界」とは、こういった連結を可能にする許容性と柔軟性を意味する。

16時30分から行われた特別講演「ヴァージニア・ウルフと戦争」は、誤解を怖れずに言うならば、（すくなくとも報告者にとっては）非常に感動的であった。日本におけるウルフ研究の第一人者である出淵敬子氏が伝える『ジェイコブの部屋』論の内容が示唆に満ちているのは言うまでもないが、静かに語られるひとつひとつの言葉が「戦争を描くことによって平和を希求していた」ウルフの姿を鮮明に浮かび上がらせ、その姿は作品中の、息子を戦争で喪った母、ベティ・フランダーズの像と結ばれる。ウルフの創造した人物たちの輪郭がくっきりと脳裏に刻まれるきわめて印象的な講演であった。

研究発表と講演はさまざまな知的刺激を与えてくれた。これは、さまざまなテーマに果敢に取り組んだアイリス・マードックという存在が私たちに提供してくれた財産のひとつだろう。今後のマードック研究の発展を予感させる嬉しい午後であった。